
オーバーラップ・ラブストーリー

APORO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーバーラップ・ラブストーリー

【Zコード】

Z2220

【作者名】

APORO

【あらすじ】

自分の過去の恋。それを現在までひきずっていた高校生男子に起きた不思議な話です。

(前書き)

自分の人生を巻き戻したい。そんな願望などがある方、どうぞこれを読んで見てください！

でもこれは短編でこれで終わりです。僕にとってこの作品はテストのようだ物です。皆さんの評判が良ければ続きを連載していきたいと思います。ばんばんコメントお願いします。

オレは富田大地。十八歳。

ハッピー、ハッピーって思っていた高校生活はもつ早々と終わらうとしている年頃。とは言つても、高校生活なんて夢見るほど樂しくはなかつたなあ。バスケ部では、レギュラーだつたけどチーム自体はかなり弱い方だつたし。勉強なんて、平均点以下赤点ギリギリみたいな中途半端な位置を三年間ずーっと泳いできた。

友達は、クラスが変わる度に変わつていった。一年生の頃の友達は一年生になつて違うクラスになれば、廊下ですれ違つたときに

「おはよ

「おう

みたいな会話しかしなくなつた。一年間培つてきた友情があんなに簡単に終わるなんて、思つても見なかつた。

唯一、オレが面白いと思つたのは恋のはなしだけだ。世間的には恋バナとでもいうところか。俺自身、女子とはかなり話す方だから「あれ？もしかして脈アリかも」

とか、思つてそれを友達に話してバカにされて。時には、クラス中で噂された。

でも、オレが本当に惚れた女はオレの学校にはいなかつた。

オレとその人は同じ中学校だつた。名前は、飯塚美咲。学年では絶対にトップ3には入つている程可愛かつたし、性格も良いつて評判だつた。

一年生の時に、ダブルデートに誘われた。もう一組は完全に付き合つていて、学年ではすでにみんな知つていた。正直、めっちゃ嬉しいでたまらなかつた。だって、好きな女の子にデートに誘われたのだから！

前日、オレは興奮して眠れなかつた。ベッドに入つても目が冴えて眠れない。まるで、遠足前のガキだつた。

当日、オレは夜眠れなかつた割に朝早く起きた。身支度は出発一時間前には完全に出来ていた。鏡を何度見たかなんて覚えていない。

オレ達は映画を見て公園で昼ご飯をたべた。映画は、その時にはやつていたラブコメだつた。オレはもちろん美咲と隣りだつた。映画の内容よりも心臓の音が聞こえなかつた。昼は美咲が作つてきてくれた。オレ達と一緒に来たカップルは普通に一緒に食べていて、それでいてオレは一層恥ずかしくなつて昼ご飯を受け取つた物の中々食べることが出来なかつた。こうしていると周りの人には「あ～カップルなんだなあ」

つて思われるんだな。と思うとどうしようもなく恥ずかしくなつた。

それと、地元の祭りにも一緒に行つた。もちろん、他にはいたし二人つきりになる機会なんてはつきり言つて全然なかつたのは確かだつた。それでも、最後にやつた肝試し（とは言つても脅かす役などなく、ただ墓地を歩くだけ）では偶然に美咲と一人一組になつてからかわれた。実際、オレは嬉しかつたし美咲も顔を赤くしていた。肝試しの時にオレ達の間には拳一個分ぐらいの間しかなかつた。本当に恐かつたてのもあるし、近寄りたいと思つたのもある。半々だつた。

肝試しの中でオレはジュースを買おうとした。美咲が手を袖に引

つ込ませて寒そうにしてたから、
「ホットの奴でも買おうか？」

とオレが言うと、

「大丈夫だよ。そんなに寒くないもん」と美咲は返した。

「嘘だあ。手、引っ込めてるじゃん」

「え？ これは・・・クセ！」

「そんな事言つても寒いんでしょ」

「・・・うん」

彼女は口を開かずに言つた。オレは少しにやけながら、小銭を入れた。

「なに飲む？」

「コンポタ」

「それはオレが飲むから違う奴にして（笑）」

「えへ、いやだ（笑）」

本当は、全然ホットコーヒーの方が飲みたかった。

ガシャン

「はいよ」

オレは「ーンポタージュを持つて差し出した。

「ありがと」

「貸しね」

「や・だ」

彼女はこぼれんばかりの笑顔でオレに笑顔を向けた。

これがオレ達のたつた一つの「トーントの話。

昔の事を鮮明に思い出してしまひ。

「おっさんみたいだな」

それでも、オレの心の一番大きい思い出だ。それを思い出そうが思い出しそうが、オレの勝手だ。それでもそろそろ前に進まなけれ

ばいけない。

分かつている。分かつている。でもまた夢の過去へ引きずり戻される。

ふつと畠を下に向ける。右手で顔を覆おおつとしたとき足下の古い腕時計に気がついた。オレはそれをおもむろに拾い上げた。かなり年季の入った物ようだった。オレはそれを何の考えもなしに投げた。いろいろがつもつていた。すると・・・・・。

「な、なんだよ！？」

周りの景色がオレを中心によがみだして、闇に包まれた。どこからともなく聞こえる声。

お前の人生、やり直してみるか？

「え！？」

お前の後悔はむなし過ぎる。

「・・・」

お前が後悔する前まで時間を戻す。

「な、なんで！？」

お前の惨めな姿は私のあられを誘つ。そして少しの沈黙。

「やつてくれ」

畠を開ける。見慣れた天井。起きあがる。洗面所に行く。おそるおそる鏡を見る。自分の幼い顔に驚愕する。

(後書き)

気に入つた方はコメントお願いします。それに応じて続きを書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2220j/>

オーバーラップ・ラブストーリー

2011年1月26日02時36分発行